

令和 7 年 7 月 1 5 日

TAITO フューチャースクール検討委員会 先進校視察 報告

- 目 的 「令和の日本型学校教育」の構築に向けた課題に対する解決策や、これからの学校創りに求められるノウハウ等、今後の台東区立学校における学校教育及び教育環境の検討の参考とする。

第 1 春日井市立出川小学校

- 1 視察日時 令和7年6月11日(水) 午前9時15分から午後0時30分まで
- 2 参 加 者 TAITO フューチャースクール検討委員会 委員及び事務局ほか 4名
台東区教育委員会 教育改革担当課長 増嶋 広曜
統括指導主事 島山 繁善、前 博毅
教育改革係 係長 松田 淳

3 報告事項

(1) 概要

令和4年度から令和7年度まで文部科学省指定の研究開発学校として、高森台中学校と研究課題「生涯にわたって自ら学びを進めていくことができる児童生徒の育成を目指した、これからの時代の学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた教育課程及び指導方法に関する研究開発」に取り組んでいる。

令和5年度と令和7年度に文部科学省指定のリーディング DX スクールとして、「情報活用能力の育成」、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた GIGA 環境の活用」などに取り組んでいる。

ア 学校経営方針

本校では、学校経営方針として、「Mission-自立した学習者-」、「Vision-児童も教師も一人一人が力をつける-」、「Value-多様な個が成長できる場をつくる-」を掲げている。これは教職員にも共有され、各自が日々の実践をこれにつなげて考えている。

Missionである「自立した学習者」を育てるためには、「自己決定・自己選択」、「学習過程(シンキング・サイクル)」、「学び方(見方・考え方や情報活用能力)」が重要であると共有されている。

自立した学習者とは、自分自身で学習計画を立て仲間と協働しながら課題解決や問題発見をする児童である。ここで言う「仲間」は「友達」とは異なる点も強調されている。

イ 新しい学びの背景

自立した学習者を育成する背景には、新型コロナウイルス感染症による経験がある。コロナ禍で児童が学校にいられない、または教師がいなければ学べないという現実を目の当たりにし、学校にとってショックな出来事であった。それまで自主的な学びを意識して取り組んできたものの、実際には通用しなかったという反省から、資質・能力をきちんと育成する必要性を強く認識した。これまでの一斉授業では、教師主導で「主体的」な学びを提供してきたものの、多様な場面で 役立たないことが判明した。そこで、「自分たちで自分の学びを認知しながら、自分で学習を進

めていく」方法へと転換した。この転換に、クラウド環境の導入が大きく寄与し、学びを加速させる装置となっている。

ウ 情報活用能力の育成

情報活用能力の育成については、東京学芸大学の高橋先生と連携してその捉え方を構築し、過去4年間実践を進めてきた。

- ・ カリキュラム 小学校1年生から中学校3年生までの9年間の一貫したカリキュラムを作成しており、クラウド環境での学習を前提としている。
- ・ 探究的な学び 情報の時間は探究的な学びを重視しており、クラウドを活用しながら探究的に学習が進められる。単元全体、年間全体が探究的な仕組みとなっており、1単位時間ごとの授業も探究的な設定である。
- ・ 反復 同じことを何度も実践し、確実にできるようになるまで繰り返すことを重視している。単に伝えるだけでなく、子供たちが自分で課題を設定し、やり切るところまでを目標としている。失敗を成長の機会と捉え、常によりよい更新を促している。第5学年からAIについて学び、教職員も業務でAIを活用している。これにより、
- ・ AI の活用 児童がAIを使って学ぶ姿も観察できるようになっている。情報科の学習は、他の教科と横断的につながっていることを意識することが非常に重要である。各教科の教科書や指導計画から情報活用能力や情報を扱う部分を抽出し、情報の時間で先行して学び、その後各教科でさらにレベルを上げて活用するという構成である。これにより、児童はどの教科のどの場面で情報活用能力を発揮できるかを理解して学習を進めることができる。
- ・ 汎用的な学び 情報活用能力は、各教科に「ひっそりと」「何気なく」仕込まれている「教科汎用的な学び方」の特性を持っている。これは見過ごされがちであるため、情報の時間を設定して意識的に育成している。例えば、国語の物語文や社会の具体と抽象の学習など、多くの教科に共通する基礎的な能力として位置付けられている。児童は情報活用能力を予想以上のペースで習得しており、「だんだんと下の学年に下がってきている」と認識している。高学年だけでなく、1年生でも端末活用が進められている(1年生の端末活用は6月から、6年生が教えに来る)。
- ・ 習得ペース

エ 指導方針と実践

(7) 自己選択・自己決定の尊重

授業では意図的に児童が自己選択・自己決定する場面を多く設定している。

- ・ 学習ルール 低学年では教師が具体的に指導するが、高学年になるにつれて児童自身が判断しながら進めるように促している。
- ・ 教師の役割の変化 教師の指導は、低学年では指導型が大きく、高学年になるにつれて支援型へと移行する。ただし、単元の前半部分では高学年でも教師が細かく指導し、基礎知識を定着させることで、その後の自立的な探究活動につなげている。

(4) シンキングサイクル（学習過程）の重視

シンキングサイクルという問題解決のプロセスを身に付けることが非常に重要である。

- ・ プロセスの内面化
 - 1 課題の設定 課題を設定し、自分の現状を認識する。
 - 2 情報の収集 周囲の情報を収集し、目指す方向性を定める。
 - 3 整理・分析 収集した情報を整理し、自分のできることを明確にする。
 - 4 まとめ・表現 学習で言えば、投入時間の決定など、計画を実行に移す。
- ・ 個別最適化 このサイクルを児童それぞれが自分のペースで回せるように促し、同じような課題をもつ仲間と協力して解決に取り組むことを奨励している。
- ・ 「仲間」との協働 「友達」と異なり、「仲間」とは共通の目標を共有し、課題解決のために互いに厳しい意見も言い合える関係性を指す。児童が互いの進捗状況を確認し、協働する上でクラウド環境は有効に機能している。

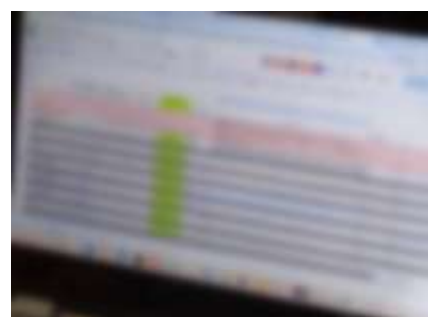
(ウ) 学びの基盤と多様な学習方法

- ・ 人と人との関係性 端末利用が中心に見られがちだが、基本は人と人との関係の中で学ぶことを重視している。
- ・ 3つの資質 学習の基盤となる3つの資質(情報活用能力等)を教科横断的に育成している。
- ・ 文脈を超える再現性 その場で一時的にできることよりも、文脈を変えても再現できる、他の場面で応用・発揮できることを求めている。教師は児童が最終的に能力を発揮する形をイメージしておくことが重要である。
- ・ 課題解決のマインド 端末に堪能な児童を育成するのではなく、課題解決のために端末や資料など多様なツールを総合的に活用できるマインドをもった児童を育成することを目指している。

また、端末利用が中心になる中でも、ノートに書くことも非常に重視しており、自立して学習できるようになった際には、どちらの手段も選択できるようにしている。コミュニケーションについても、チャットだけでなく、対面での会話やアウトプットの機会を多く設けている。

(2) 授業の様子

- ア 児童は、思い思いの場所・道具・他者と学習を進めている様子が見られ、自己選択・自己決定の機会と場が保障されていた。
- イ スプレッドシートで児童の取組状況(誰と学ぶか、教員の支援が必要かなど)が色分けされて提示されていた。
- ウ 振り返りの場面では、スプレッドシートの共同編集機能を活用して、他者参照しながら授業の振り返りを行っていた。
- エ 外国語の授業で、音声入力機能を活用して、正しい発音の練習をしていた。



第2 春日井市立高森台中学校

- 1 視察日時 令和7年6月13日(金) 午前10時20分から午後4時05分まで
- 2 参加者 TAITO フューチャースクール検討委員会 委員及び事務局 2名
台東区立駒形中学校長 渡邊 和彦 先生
台東区教育委員会 統括指導主事 島山 繁善

3 報告事項

(1) 概要

令和4年度から令和7年度まで文部科学省指定の研究開発学校として、出川小学校と研究課題「生涯にわたって自ら学びを進めていくことができる児童生徒の育成を目指した、これからの時代の学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた教育課程及び指導方法に関する研究開発」に取り組んでいる。

令和6年度から令和7年度まで文部科学省指定のリーディング DX スクールとして、「情報活用能力の育成」、「主体的・対話的で深い学びの実現に向けた GIGA 環境の活用」などに取り組んでいる。また、令和6年度は生成 AI パイロット校として、「生成 AI の教育活動での活用」、「生成 AI の校務における活用」に取り組んだ。

ア 学校経営方針

本校の最も重要なビジョンは、「一人ひとりを力づけて、学校を離れても、自分で一歩ずつ学びが続くように」することである。生徒が学校を卒業した後も、働きながら自己学習し、スキルアップして次のキャリアを目指せるような力を育むことを重視している。このビジョンの実現には、1人1台端末が不可欠である。

現在は、クラウドと生成AIが常に利用可能な状態にある。これは、いつでもアクセスできる環境であり、教育実習生であっても同じ環境で学んでいる。

イ 学習プロセスと指導方法

本校の学習活動は、生徒が主体的に学びを深めることを目指している。

- ・ 活動と学びの連動 教師は、生徒の活動が単なる作業で終わらず、真に意味のある学びにつながっているかを常に確認している。生徒に対して「今日は何を頑張ったのか」「何が分かったのか」を問い掛け、言語化を促す。生徒が言葉に詰まる場合は、自分で作成した学習目標のメモ(何に取り組むかを書いた紙)を活用させる。
- ・ 学習の循環 学習は「情報の収集」「整理・分析」「アウトプット」のプロセスを重視する。
 - － 情報収集 従来の一斉指示中心の授業とは異なり、生徒自身が情報を集める。教科書を読み込み、そこから情報をまとめる練習を繰り返す。
 - － 整理・分析 集めた情報を自分なりに整理する。旧来のツールから最新のもの(例:FigJam)まで活用し、頭の中で情報を比較・分類する思考を促す。
 - － アウトプット 整理した情報を基に、スライド、ドキュメント、プレゼンテーションなど様々な形式でアウトプットする。アウトプットの前に、一度自分の言葉で説明してみるところを奨励し、うまく説明できない場合は再度情報整理に戻るといった反復的な学習サイクルを重視している。

- ・ 個別最適化された学び(複線化) 生徒は自分のペースで、一人で、誰かと、あるいは教師に質問しながら学ぶことができる。これは、特定の学習形態を意図したものではなく、生徒が主体的に学びを進める中で結果的に多様な学習経路(複線化)が生まれている。
- ・ 学習方法の振り返り 学習内容だけでなく、学習方法そのものを振り返ることを重視しており、これが生徒の成長につながっている。

ウ 生成 AI の活用

生成 AI は、生徒の学習をサポートし、個別最適化を促進する強力なツールとして活用されている。

- ・ 個別指導の代替 生徒が分からないことを生成 AI に直接質問し、自分にとって分かりやすい説明を得ることができる。理科の実験手順や数学の有理化など、教師が何度も説明する必要がある内容でも、生徒が自己解決できるようになっている。
- ・ 教師の役割の変化 教師は繰り返しの説明に時間を費やす代わりに、生徒が思考力を働かせているか、深く考えているかを見ることに時間を割くことができる。教室に「先生が一杯いるかのような状態」を作り出している。
- ・ AI 活用のマインドセット 生徒たちは、AI が時に間違えることを知っており、得られた情報を鵜呑みにせず、「それ本当？」と検証したり、信頼性の高い情報源を尋ねたりする姿勢を身に付けている。AI は、電卓と同様に、自身の成長のために活用するツールであるという認識を育むことが重要である。

エ 教師の役割と能力開発

教師の役割は、学習プロセスを設計し、生徒の学びを支援することにある。

- ・ 綿密な準備と「言葉掛け」 教師の準備と、生徒への適切な「言葉掛け」が何よりも重要とされている。
- ・ 観察と支援 教師は、生徒の活動を常に観察し、適切なタイミングで助言や支援を行う。助言は、単なる説明だけでなく、「今何やってるの?」「説明してみよう」といった言葉掛けや、情報の提供、学び方の示唆、思考を促す発問など多岐にわたる。
- ・ カリキュラム開発 教師は、生徒の学習状況を把握しながら、情報活用能力を段階的に育てるための系統的なカリキュラムを作成している。これは、他校の系統表をそのまま利用するのではなく、自校の実態に合わせて教師間で指導内容を整理し、構築するプロセスを重視している。
- ・ 教師自身の情報活用能力 教師自身が常にクラウド環境やチャットツールなどを活用し、情報活用能力を向上させることが、授業作りの基盤となる。

成果としては、生徒が扱う情報量が大幅に増え、アウトプットの量と質が向上している。また、自分の考えを言葉で表現できるようになるなど、コミュニケーション能力の成長も顕著である。

また、自分の学びが記録され、振り返りが可能になったことで、過去の自分との比較を通じて成長を実感できるようになった。これは、到達目標だけでなく、個人の進捗を重視する学習観へとつながっている。

旧来の知識の丸暗記やパターン化された学習から、「本当の意味で力がつく」学習へとシフトしている。これは、実社会で役立つ学力を育む方向性につながっている。

(2) 授業の様子

ア 生徒は、思い思いの場所・道具・他者と学習を進めている様子が見られ、自己選択・自己決定の機会と場が保障されていた。

イ スプレッドシートで生徒の取組状況(誰と学ぶか、教員の支援が必要かなど)が色分けされて提示されていた。教師が、スマートフォンでスプレッドシートの情報を確認しながら、子供たちに助言や支援を行っていた。

ウ 多くの授業で、生徒がまとめた情報を他の生徒に説明する様子が見られた。また、説明に対して、質問したり、評価したりという様子も見られた。

エ 分からないことがあると、生成AIに繰り返し質問をして、自分が必要とする情報を収集する様子が見られた。



○ 考 察

【生成AIの利活用】

児童・生徒の生成AIの利活用については、原則控えることとしている。一方、教員には生成AIの積極的な利活用を促している。

文書生成AIを適切に利活用し、業務効率を大幅に向上させることにより教職員の時間的な余白(ゆとり)を生み出すことができるものとする。

【環境によらない教師の指導力】

両校共に片廊下型教室配置の学校であり、オープンスペースは確保されていなかったが、子供たちの学びは教室内で自由かつ柔軟に展開されていた。

したがって、オープンスペースの有無が学びの在り方を左右するのではなく、既存の環境の中で教師がどのように学びをデザインするかが重要であるとする。

【情報活用能力育成カリキュラム】

学習の基盤である情報活用能力は、デジタル学習基盤の活用に際しても親和性の高い資質・能力であり、計画的かつ継続的に育成することが重要であるとする。

中学校の選択制を採用している本区においては、小学校教育までの学習の成果を中学校教育に円滑に接続するために、9年間を見通した系統性のある情報活用能力育成カリキュラムを作成する必要があるとする。